

新

歌人群像

北見志保子

●もののあわれの具現

●市川敦子●



北見志保子（本名濱朝野）は一八八五（明治十八）年一月九日、父川島亨一郎、母勢津の長女として、高知県幡多郡宿毛村（現・宿毛市）安ヶ市五十三番屋敷に生まれる。川島屋敷と呼ばれ、後ろの山は川島山と呼ばれた。現在、宿毛小学校北側に「北見志保子生誕の地」の碑の表示がある。当時の士族屋敷跡である。父亨一郎は、板垣退助に心酔し、自由党员であった。家財を傾けて全国をかけめぐった人で、出自は宿毛藩下級武士である。母勢津は、同藩騎馬格の横山正安の娘である。

わが父が畑を売り雪舟を売りしはこの
人か黒くて堅き銅像みれば面白し

『花のかけ』

人なみに学ばしめむと亡き母が売りし
この山うしろつつじ山

『珊瑚』

一八九九（明治三十二年）、志保子は宿毛小学校高等科を卒業。その頃、一年下に橋田東聲が中筋村有岡から高等科に通学していた。一九〇三年、中村町裁縫教員養成所（現・中村高等学校）を卒業、郡内の小学校に勤める。一九〇六年九月、宿毛小学校訓導を依願退職、上京する。上京後は、国語伝習所や中国派遣教員養成所に学んでいる。

あるとき、筆者上京の折の話に、志保子が

『万葉集』のもととは中国の漢詩だから、中国に渡って中国文学をお勉強するのが夢だった」といわれたことがあった。近藤芳美が中市に講演に来訪されたとき、「『文選』まで廻らなければ『万葉集』はわからない」といわれたことが思い出される。

待つ女

一九〇九（明治四十二）年、東小松川小学校に勤務。この年の三月、東聲は東大英文科に入学。在郷中、二人は淡い恋心を抱いており、志保子は働きながら苦学生であった東聲の学資の援助をする生活がはじまる。一九一三（大正二）年、東聲卒業と同時に結婚生活に入り、小松川町松江に居住する。ただし戸



奈良・東大寺、龍松院で。左から筒井寛秀、楨志乃、北見志保子、筒井キヨ、筒井英俊（1940年ごろ）

籍上の婚姻届けは一九一七（大正六）年、上京後十二年、〈待つ女〉の時代を生き抜いてきた。〈待つ女〉とは、耐える女、他人のためだけに、その生を燃やす女のことをいう。

一九一七年三月、東聲は歌誌「珊瑚礁」を創刊。志保子も創刊に参加し、橋田あさ子、橋田ゆみえのペンネームを用いた。一九一六年六月「珊瑚礁」終刊、新たに「霸王樹」を八月創刊。これに参加。

一九二〇年、東聲の弟子、慶応大学学生の濱忠次郎を知る。「霸王樹」編集を手伝うため東聲宅に出入りしているうちに、母をなくしていた忠次郎は、志保子の母性的な優しさと抱擁力に心惹かれたのだろう。志保子は誰にも優しく、ふところの深い人柄だった。志保子は、東聲の弟、亀吉が肺結核を病んで養家先から帰り闘病生活をしている世話に、郷里高知へたびたび帰っている。志保子亡き後に忠次郎の後添いとなった、志保子の弟子の楨志乃に、「東聲とは結婚の段階でもうさめていた」と、志保子自身話されたという。性格的なものがあつたと思われる。

東聲との破局

一九二二（大正十一）年、濱忠次郎は慶応

大学理財学部を卒業。七月、志保子は東聲と話し合いの上、別居し、奈良市の知人、須山家に身を置く。八月初め、高野山山籠を思い立つ。

何事も忘れてゆかむ頂きにつづきてし
ろき山はらのみち

『月光』

悔ゆるとき来るともよしや天地にこの
人をこそわれは恋ふらめ

『花のかげ』

志保子の不転の決意を象徴した歌である。一方、東聲は次のような歌を詠んでいる。

七月遂に別居す。奈良なる妻に与ふる歌
逢ふべくはただにまちをるわがために萩
咲きしやと問ひこせ吾妹

『橋田東聲歌集』

山籠の日々、高野山きつての名僧といわれた水原堯栄氏に導かれて、一か月の結界を経たのち、東大寺塔頭・龍松院の筒井英俊氏のもとに七か月余りを滞在し、その間、仏教美術について、また仏像について学び、寺々をめぐる、仏像に心を寄せながら、ひたすら自らの心の内に育つてゆくものを大切に過ごすのである。世の常の恋愛沙汰とはほど遠い、運命的な人間の絆のようなものが感じられる。この年、一九二二年十二月、濱忠次郎はフランスに留学。

北見志保子

再び「待つ女」の境涯に入る

外つ国も秋さびつらむ我がひとりもみ
づる木々の山々をみて

『月光』

み陵の松ふく風をききみつ心は深く
ひとを思へり

自然発生的な感情の流露で、不思議に静謐な相聞歌である。

一九二四（大正十三）年五月、東聲は、長崎県出身の紀内茂子と婚姻、第二の人生を歩むこととなる。

二五年五月、濱忠次郎がフランスより帰国し、五月十八日付で千代田生命に入社。志保子は忠次郎との結婚生活に入る（婚姻届けは、



母勢津の7回忌の墓参の折、知人宅での歓迎歌会で。中央の洋装が北見志保子。右端は楨志乃（1934年11月）

忠次郎の父庄蔵の没後で、一九三〇（昭和五年）。

日常生活が落ち着き、古泉千樫の「青垣会」に入会。一九二五年一月、川上小夜子、水町京子と女流歌誌「草の実」創刊。筆名をこの時から北見志保子とする。

筆名は、北海道北見市から送ってきた塩鮭が台所にあり、思いついたというが、偶然か必然か、北見市は、坂本竜馬の甥、坂本直寛が北見地方開拓の先駆者として開拓した土地であり、一八八四（明治十七）年高知県議に当選、志保子の父亨一郎は高知市小高坂に住んでおり、自由民権運動で活躍した直寛と亨一郎の交友があったと思える。

「北見を筆名にしつつその国を知らずけふ樺太にゆく、即ち途上にて」の詞書がある。

北見の国のものみな清らなるに心ひら
け夢の中なる朝息づく

『花のかげ』

一九二六（大正十五）年、東京・小石川駕籠町の新居に移り、幸せな生活が続く。

一九二七（昭和二年）八月十一日、師の古泉千樫逝去。その頃、釈道空は「土佐民俗探訪」のため高知県吾川郡伊野町の榎本神社を出発して室戸岬に向かって歩いてきた。千樫の訃報は、新聞で知ったとも電報によるも

のとも言われる。

ひたおもてたたひみちたるひるの海う
たがひがたし人はしにたり

釈道空

千樫逝去ののち、同門の三ヶ島霞子らと十一月に歌誌「青垣」を創刊。創刊号が千樫追悼号となる。

一九二八（昭和三年）一月、第一歌集『月光』発刊。巻末に、最初のほうは千樫に目を通してもらっているところある。東大寺・三月堂の月光菩薩の名前をおかりしたとあり、題字も天平の写経から筒井英俊氏が選び出し、月光菩薩像の写真もすべて英俊氏により、装幀もともにお世話になったと記してある。次は巻頭の歌。

道のべの枯れ芝中の細つばなほのかに
赤く芽ぶき初めたり

『月光』

初々しい感覚と声調の整った歌である。

一九三四（昭和九年）年、徳田秋声に師事、「あらくれ」同人となる。山川朱実の筆名で『朱実作品集』を出版。多く来し方のことが二人称で綴られている。

この年十一月、母勢津の七回忌法要と墓参のため宿毛に帰郷。帰途、奈良に立ち寄り、磐之媛御陵に詣で次の歌を作る。



奈良・東大寺、龍松院での北見志保子 (1944年6月)

人恋ふはかなしきものと平城山にもと
ほりきつつ堪へがたかりき 『花のかげ』
古へもつまを恋ひつつ越えしとふ平城
山のみちに涙おとしぬ

一九三五(昭和十)年、高知県伊野町出身の平井康三郎により、「平城山」「九十九里」「甲斐の峽」三部曲として発表、「平城山」の歌は有名となる。

同年、「多磨」創刊、同人となる。

一九三七(昭和十二)年、北原白秋に「しばらく歌を休ませてください」と申し出たあと、除名され、それを知った川上小夜子は「多磨」を退会、小夜子と共に女流歌誌「月光」創刊。斎藤茂吉は千樫の死後、当然、逍空のもとにゆくと思っていたといわれたそうである。

一九四一(昭和十六)年九月、「銃後文化講演会」に参加、樺太に旅行し、各地を講演。

随筆集『国境まで』を出版。母校中村高等女学校でも帰郷して講演をする。

一九四五(昭和二十)年四月十三日、東京北部大空襲で駕籠町の家全焼。目黒区洗足の新居に落ち着く。

四六年、篠井嘉一らと「定型律」創刊。「東京歌話会」結成に参加。「短歌季刊」創刊に参加。四九年、超結社で「女人短歌会」を結成、編集発行人となる。メンバーは阿部静枝、五島美代子、長澤美津ほか。

一九五〇(昭和二十五)年、慶応大学聴講生となり、逍空より『万葉集』や『源氏物語』の講義を受ける。同年九月「女人短歌」叢書第一集『花のかげ』発刊。五年一月、宮中歌会始に歌人として陪聴を許される。四月、帰郷し、東聲の墓に詣でる。九月、歌誌「花宴」創刊。「定型律」解消。

三輪山の白き雲みれば額田女王が粉愁
香怨のとき永くすぎたり 『花のかげ』
三輪山の雲を恋ふらくいつよりかわれ
を育てしおほいなるゆめ

しばらくは心の故里である奈良に遊び、天平の女人との心の交歓を支えとして独自の歌風を育ててきた志保子。五三年五月二十八日、故郷宿毛小学校に歌碑が建立され、その除幕

式のはれやかな日の志保子の喜びは、母への賛歌であった。故里人への感謝であった。

山川よ野よあたたかきふるさとよこゑ
あげて泣かむ長かりしかな 『珊瑚』
わが歌の石ぶみにしるすうたごゑの地の底なる母にひびけと

一九五五(昭和三十)年二月、『珊瑚』発刊。あげぐれの石ころのみちをつまづきつつあはれなりけりいつの世も女は

王朝の酸ゆき傷心を思ひつきあゆむ朝
あけをひとつなく蟲
いくばくの命をしみて旅をしつひとり
の夫をただ恃みとし

眺めの歌であり、古典の撰取が生かされてもののあわれを具現している。

絶詠五首は臨死体験の歌であり、まことに「まれびと」の歌といえよう。晩年、逍空に心酔。

出づることなき永劫の門にむきてゐて
急ぎ歩みしを今朝覚めて思ふ

一九五五(昭和三十)年五月四日永眠。逝去一週間前の歌(「花宴」五月号)である。

(いちかわ・あつこ)「やまなみ」(選者)